

ベルナール・フランク著

「滝の源にて——ある日本学者の追想——」

翻訳・解題：アンドレ・マルローと那智の滝に寄せて

小関 彩子

はじめに

本稿は、La Nouvelle Revue Françaiseの第295号(1977年7月)、Hommage à André Malraux(1901-1976)と題された特集号におさめられたBernard Frank著の論文「*À la source de la cascade — Souvenirs d'un japonisant*」の翻訳である。本論文が書かれた背景等について、訳者による解題を付して紹介する。

フランク論文翻訳

1958年春、フランス国立近代美術館において「世紀を超えた日本美術」展¹⁾が開催された。これは他日の展覧会、すなわち1900年の万国博覧会と、两大戦間にベルリンで開かれた展覧会²⁾を回顧し、偉大な芸術の全体像を見たいと熱望していた者の望みをかなえてくれるものであった。本展は、ついに浮世絵を脱するものであった。たしかに浮世絵は称賛に値するし、現代美術の始まりにおいて大きな役割を果たしたが、しかし現代美術の視点から見た浮

-
- 1) 以下の論文に言及のある「ヨーロッパ巡回日本古美術展」のことと推定される。
秋山光和著、「ヨーロッパ巡回『日本古美術展』の総決算」、『芸術新潮』1959年5月号、pp.54-65
野間清六著、「パリにおける日本古美術展報告」、『東京国立博物館研究誌 Museum』157号、1964年4月、p.31
 - 2) 以下の論文に言及のある、1939年にベルリンのベルガモン美術館で開催された「伯林日本古美術展覧会」のことと推定される。
岡村嘉子著、「1963年プティ・パレに現れた禅画：『日本古美術展』における禅画出品の意図をめぐって」、『成城美学美術史』第21号、2015年3月、p.66

世絵は、無限に長く多彩な伝統の最近の成果の一つに過ぎない。カタログでいくつかの主要な作品の図像を見ると、思い出がよみがえり、これを見た時の喜びを感動をもって思い出さずにはいられない。赤い衣をまとった釈迦牟尼は軽やかな花の光背をいただき、その光は周囲の闇の奥底にまで浸透している。「地獄草紙」の火の鳥は闇の中で火の粉にまかれて飛翔している。長谷川等伯の夢幻的な松林図屏風と猿の屏風。そしてアンドレ・マルローにかくも強い衝撃を与えた二つの作品について言えば、藤原隆信作の黒衣をまとった藤原光能の肖像。(彼は正当にも、同じ連作中の、より評価の高い平重盛像のほうを好んだ。)³⁾そして雪舟の水墨画、垂直の閃光のまわりに整然と配された、「結晶のように鮮明な」冬景山水図。

5年半後の1963年秋、今度はプティ・パレで日本美術展が告知された⁴⁾。これほど短い期間に2回目とは！「日本美術の中の彼岸」というタイトルは、大いに期待を抱かせるものであった。

はやる心で私は駆け付けた。入り口では約50点のプリミティヴ芸術⁵⁾の美しい作品が迎えてくれた。しかし続く諸室においては、展示されている15～20体の仏像が奇妙にも寒々しく見えたのはなぜだろうか？——それらの内には最近同じくプティ・パレに鑑真像を伴って再来した唐招提寺の薬師仏のような傑作もいくつか数えられたのだが——。私は違和感に襲われた。反対側の壁を見て気づいたのだが、そこには6～7世紀間にも及ぶ時代の他のあらゆる証言者を欠いた、不規則な一群しかなかったのだ。その一方で、日本文明の発展が禅以前の仏教諸派に影響されていた歴史は抹消されていた。

続くパネルには、いきなり「禅の伝統における仏教画」とあった⁶⁾。たしかに、周文の穏やかな風景画や単庵の「鷺図」、宮本武蔵の「鶉図」、再来し

3) 神護寺三像については、像主・作者ともに、現在論争中。

4) この展覧会の開催の経緯とその状況については、以下の論文に詳しい。

野間清六著、「フランスに見せる日本美術」、『藝術新潮』1963年10月号、p.92

野間清六著、「日本美術の“此岸”——パリの日本古美術展をめぐって」、『三彩』174号、1964年6月、pp.10-13

5) 先史時代。「プリミティヴ」の語の持つ意味については、以下を参照。

ミシェル・テマン著、『アンドレ・マルローの日本』、TBSブリタニカ、1997年＝2001年、p.82、注252

た等伯の猿などを前にして、不満をいさぐ理由はない。しかしこれらの作品が、しだいにそれ以前の時代の作品を振り返って批判する具とされるようになったのはなぜなのだろうか？ まったく腹立たしい時代錯誤というものである。東京の学芸員野間清六がカタログのために書いた論争的な紹介文が私の目にとまった。「8世紀以来日本では非常に色彩豊かな仏教画の傑作が製作され、尊ばれてきた。11世紀以降我々は詩情に富んだ世俗絵画を同じく享受してきた。この(禅僧が示してきた)白黒の芸術の簡素さへの新しい好みは、モノクロの水墨画における、それ以前の絵画には欠けていたある種の精神的深さの発見によっている。」⁷⁾

園城寺の黄不動、一對の目が我々を焼き尽くす不動の巨像が、精神的深みを欠いている？ 白い肌で白象に乗り、手を組んで静かに我々の方へと進み来る、東京国立博物館の普賢菩薩が、かような深みを欠いている？ 山々の彼方に現れる阿弥陀、我々の慣れ親しんだ風景の中に突然彼岸が出現する広大なイメージに？ 源氏物語絵巻のかくも強度な表現、自然が人間の運命に、鏡のように常に伴う諸場面に？ 私は禅画、次いで新禅画に埋め尽くされた部屋へと進んだが、闊達な気持ちはすっかり押しやられてしまった。何とも言えず味気ない中で、唯一精神の自由を取り戻してくれたのは、白隠書のすばらしい梵語の阿字であった。しかし、険しい眼差しのたくさんの達磨図や、あまりにも数多くの、ラフカディオ・ハーンの「猫を描いた少年」の物語に出てくる猫には、毛を逆立てて穏やかならざる一瞥でもって応えるほかはなかった。カタログはなおも語っていた。「13世紀ごろには、仏教は形式主義に陥っていた。この墮落した仏教に対する不満が動機となって、中国から禅を取り入れることとなった。」⁸⁾

この文を前にして、その口振りから、私はいくつかの少々簡単な護教論的なパンフレットを思い起こした。そして、この文が触れずにいるあらゆるも

-
- ✓ 6) 本展において禅画、禅宗画が展示作品の大半を占めるに至った経緯については、岡村前掲書に詳しい。
- 7) Noma Seiroku, *Introduction, L'Au-delà dans l'art japonais*, Ex.Cat., Musée du Petit Palais, Paris, 1963. P.16
- 8) 同上、p.15

ののことを考えていた。頭の中では、たくさんの絵画や高度な概念にインスピレーションを与えた他の宗派の名前が繰り返し聞こえていた。華嚴、天台、真言、浄土…。そして不意に、爆発が起こった。私の中で「禅なんてくそくらえだ！」と叫んでいたのはエチアンプルだった。これは他の誰よりも最も真に禅的な叫びだ。

家に帰ってから私は、マルローのことを繰り返し思い巡らし、考えていた。彼は明らかにこの展覧会に多大なる熱意を傾けていた。あらゆる素晴らしい作品を有したこの展覧会が、彼にとってふさわしいものであったことは言うまでもない。しかしこの展覧会がある種の偏見に基づいたものであることを考えると、それがどれほど不公正であったかは計り知れない。彼の周囲で日本仏教について長広舌をふるうような人々の大多数は、プリミティヴな(古い)仏教について少々語るほかは、禅について多く語るばかりで、およそその他については全く言及しないか、するとすれば、知りもしないのに誹謗するばかりである。鈴木貞太郎大拙は少なくともこの分野に関して確固たる教養に基づいて発言していたのだが、彼の時代以来、都合よくきらびやかで安易な言辞を弄する態度が横行してきたのではなかったのか? 「ああ、と私は自分に言った。もしマルローが私の前にいたら、何もかも説明するのに。そうすれば彼も、禅の前に日本にはしかじかの影響をあたえたこれこれの理論があったということを知るだろうに。そしてまた私は彼に、仏教と古代神道との間にある魅惑的な習合について話すのに。」しかし全ては夢だ! 彼の個人的な友人以外に誰がこの国務大臣に直接会う機会があるというのだろうか?

だが11年後、神は機会を与えられた。1974年、私は日仏会館の館長として東京にいた。この学院をマルローは常に愛し、彼の古い仲間であるルネ・カピタンが責任者である間に2度赴いている。学院は1924年にクローデルの庇護のもとに創設され、この年1974年、我々は50周年を祝っていた。マルローが朝日新聞の招きでほぼ同じころに日本に来るというのは、まさしく大問題だった。私は彼に再度会館に訪問の榮譽を与えられるよう要請する手紙を書いた。彼はド・ヴィルモラン夫人を通じて、必ず行くが、我々の祝賀会の予定よりも少し後になるだろう、と返事してきた。実際彼は5月16日に来館し、

我々の望み通り、喜んでスピーチしてくれた。我々は彼の言葉を録音し、彼はそれを後でチェックして刊行することを認めてくれた。これは日仏会館の機関誌『日仏文化』の第31分冊に掲載されている⁹⁾。

彼の到着の2～3ヶ月前、朝日の要人が訪ねてきた。この新聞社は著名なゲストに最高のプログラムを準備しようと心を砕いていた。まもなく分かったのだが、マルローは文化交流のために国際交流基金にも招かれており、また「モナ・リザ」展を期にフランス政府の特使をつとめることになる。「ご存知のように、と訪問者は言った。アンドレ・マルローの訪日はこれが初めてではありません。ところが、いつも彼に同じようなものばかり見せているように思うのです。今回は、彼が見たことのない場所を見せたいのです。何か良い考えをお持ちではありませんか？」私が大喜びしたことは容易に察しがつくだろう。私はしばし考える時間をくれるように求めた。

私と妻は大変な興奮の内にその夜を過ごした。「彼」をどこに送り込むべきか？この決定が、『空想美術館』の著者の頭の中で閃光を放ち、彼の作品の重要な結果となって現れるはずの新しいビジョンに最大の影響を与えるだろうことを、私達は疑っていなかった。不意にアイデアが沸き上がった。「彼を熊野に送ったら？“本来の聖地”たる本宮、そこで彼は常に川霧に覆われた、檜皮葺の古い木造建築の社殿を見るだろう。あるいは“新しい聖地”である新宮。そこでは彼に、仏陀の発現(権現)としての土地神を表す、巨木に彫られた荒々しくも高貴な非公開の神像を見せることになる。そして那智では、岩の背に沿って滑り落ちながら、あたかも天からまっすぐに落下するかのように見える、そして時には反対に、滝壺の泡立つ気泡があまりに立ちのぼるために、地から高みへと上昇しているかのように見える、崇高な滝の前で観想に沈むだろう。『熊野三山』、それは伝統的に母なる女神¹⁰⁾の墓があるとされるところであり、かつて蟻のようにと称されるほどに数多くの巡礼たちが訪れた、特別に聖なる地であり、紀伊山地の奥深くにあって彼岸への足掛か

9) *Réception en l'honneur de M. André Malraux à la Maison franco-japonaise le 16 mai 1974*, 『日仏文化』No.31、1974年7月特集：日仏会館創立50周年記念特集号 II / Numéro spécial: Cinquantenaire de la Maison franco-japonaise fasc. II

10) イザナミノミコト

りである。この熊野三山の世界によって彼は、それまで度々訪れた日本よりもはるかに古い日本を知るようになるだろう。それは樹木と山によって構成される生命的であり同時に神聖な環境と密接に結びついた、精気溢れる民衆の日本である。それはまた、天台宗と真言宗の影響のもとに9世紀に芸術的頂点に達した、儀式と図像に表現される密教的な日本である。そこでは、ふくよかな体のプロポーションはレアリズムとは無縁であり、ただ宗教的な意図にのみ従っている。顔貌においては永遠の純粹さが肉体の外皮を超越している。強い眼差しにあって視覚は内面へと吸い込まれる。」

「熊野の後は、京都に戻って、高尾の神護寺にお連れしなくては。そこでは峻厳な微笑を浮かべた薬師如来坐像、多宝塔におさめられた五色の虚空蔵菩薩、そして傷みの激しい紫綾地の胎藏界曼荼羅と金剛界曼荼羅の両界曼荼羅の写し、通称高雄曼荼羅が見られるだろう。だがいずれにせよ、彼はおそらくあそこには行ったことがあるだろう…神護寺はあの有名な一連の黒衣の肖像画¹¹⁾を所蔵しているのだし？

道中、もちろん伊勢で、アンドレ・マルローがまだ一度も行ったことのない、太陽の女神天照大神の神社に滞在すべきだろう。社殿は20年ごとに建て替えられてきており、みごとに磨かれた新しい木材が白い砂利の上に清浄さを際立たせている。」

私たちの提案(海に投じた瓶の手紙)がどうなっているのか、長い間なしのつぶてだったが、ある日、伊勢と熊野が旅程に含まれることになったといううれしい驚きが届いた。熊野についてはためらいが無かったわけではない。なぜなら、このアイデアは一見突飛に見えたし、自動車で山地を縦断する疲労についても危惧されたからだ。しかし結局、冒険精神の信奉者たちが勝った。

出発直前に、フランス大使ド・ラブレ氏のご厚情によって、アンドレ・マルローと長時間会見し、今回の旅行の選択に関して私が果たした役割については言わずに、私がかつてこの地の宗教史について書いたテキストと古代日本の仏教と文学を扱った論文¹²⁾を手渡す機会をいただいた。この論文で私はまさしく10年以上前から彼に話したいという熱意にさいなまれていたテーマ

11) 神護寺三像

に取り組んでいたのだ。帰ってから彼は私に二つとも読んだと言ってくれた。そして、これまで常に、彼の理解を超えていて、あまりにも専門的な説明ばかりに思えて嫌気がさしていた仏教のいくつかの要素を、これらの論文を通して発見した、と言った。

作家の親友にして卓越した日本語訳者である竹本忠雄は、彼が同行したこの地方への、初めてにして、惜しくも最後となった長旅について、いくつかの話を書いている。

熊野の「新しい聖地」(新宮)では、通常は閉じられている社殿の扉が彼のために開かれた。諸神像を前にして、この鋭敏な観察者がたいして衝撃を受けなかったのは明らかだ。この壮大な諸像は私にとっては常に非常に印象的なのだが、そこでは、いわゆる聖なる表現の関係において、古き神々の厳めしい荘厳さが神々の「本来の状態」と見なされている仏陀の慈悲と結びついている¹³⁾。しかし、後に私も気づかされたのだが、この地方の奥地で彫像されたこれらの作品が都の仏師作の姉妹作品と同様、いかなる不器用さも持ち合わせてはいない、ということはおそらく称賛に値するだろう。『非時間の世界』には、「偉大な彫刻作品を総めぐりしてみたら、まず、さいげんのない結果になるだろう」¹⁴⁾とある。ことはそれ以上だ。マルローはあまりシンクレティズム——ここで言うシンクレティズムとは、太古の自然環境と結びついた信仰を宇宙的言語に翻訳することなのだが——には肩入れしていないように見える。それに彼は、非常に的確に、場所の起源の謎に言及している。彼は竹本忠雄に言った。「これらの彫像は、他の日本人が神性の『実質的な肉

✓ 12) この2本がどれであったのかは定かではないが、そのうちの1本はおそらくは下記のものであったろうと、フランク夫人は推定している。

Gaston Renondeau et Bernard Frank, *Le Bouddhisme Japonais : L'introduction de Bouddhism au Japon, dans Histoire des religions I; Les religions antiques--La formation des religions universelles et les religions de salut en Inde et en Extrême-Orient*, folio Gallimard, 1972, pp1320-1350

13) 熊野夫須美大神の本地仏は千手観音、熊野速玉大神の本地仏は薬師如来である。

14) André Malraux, *La Métamorphose des dieux tome 3: L'Intemporel*, Gallimard, 1976. Chapitre 8, p.220

この部分は「日本空想美術館」、『藝術新潮』1977年1月、第28号p.178における竹本忠雄の訳による。

体』と呼ぶようなものとは全く違う。我々フランスの黒い乙女マリアの陰には、何らかの黒い石があった。それゆえこれらの男女2神像の後ろには、おそらく石か木が隠されているはずだ。」¹⁵⁾

彼が「本来の聖地」(本宮)に到着した時、曲線を描く大屋根と風車の羽根の形をした千木には夕方の陽がさしていた。彼はこれを見て感嘆し、棟木の形の中に讃仰の態度を発見した、と信じたⁱ⁾。しかし、彼がこの旅において決定的な昂りを覚えたのは、那智の滝においてであった。この地に来る前に、彼は東京の根津美術館でこの滝の絵を見てあった。彼はこの有名な絵画の上昇する主調に打たれたに違いない。そして、これが『非時間の世界』第8章の素晴らしい観想の端緒となったのである。「私は那智の滝のことを考えている…。」¹⁶⁾ 度を超えたこの長い道のりの果てに滝に到着した時、静寂と幻想的に出現する水のとりこになって、彼は同行者にささやいた。「私はめったに自然には感動したことがないのだが…。」ⁱⁱ⁾

『神々の変容』の最近刊のこの第8章には随所に那智の滝図が登場する。「滝のシーニュ」¹⁷⁾、「不動の水」¹⁸⁾、「沈黙から来る風景」¹⁹⁾。那智の滝の絵が帯びている、同時に静穏でもあるところの「客観的内的『実相』」²⁰⁾は、「死と不可分である」²¹⁾ 空想美術館に刻印されたドラマ性とは対立するものなのである。

かつてある年、滝の源の光に向って迸った涙の雫を、私は静かな喜びのもとに思い返している。

1977年4月24日

15) この場面は以下に見られる。

竹本忠雄著、『マルローとの対話』、人文書院、1996年、p.211

16) Malraux 前掲書 p.205

17) Malraux 同上 p.232

18) Malraux 同上 p.205

19) Malraux 同上 p.208

20) Malraux 同上 p.218

21) Malraux 同上 p.231

原注 i) 『藝術新潮』、1974年7月号、東京

原注 ii) *Malreaux et le japon, rencontre sous une cascade*, dans : *Marleaux être et dire*, textes réunis par Martine de Courcel, Plon, 1976, p.163 (著者は竹本：訳者注)

解題

本論文の著者ベルナール・フランクはフランスにおける日本学の泰斗であり、フランス学士院において初の日本学のポストを得た密教学者である。本論文は、フランスの元文化大臣・作家のアンドレ・マルローが1974年に那智の滝を訪れ、帰国後その印象を『神々の変貌3 非時間の世界』に著すに至った経緯を紹介するものである。マルローの著作によって那智の滝の持つ神秘性はヨーロッパにおいて広く知られることとなった。訳者もかつて、哲学のコロックに來日したフランス人研究者夫妻から、日本でぜひ訪れたい場所として那智の滝を挙げられて、案内した経験がある。彼もまた当然のようにマルローの論文を読んでおり、マルローが那智の滝を世界に紹介するにあたって果たした影響力の大きさを見た思いであった。

著者はかねてより、西洋における日本文化の受容が武士道と、その思想的背景を為すと考えられていた禅に偏重している点に批判的であった。切腹に象徴されるような「死の文化」という通俗的なイメージが先行し、民衆の生き生きとした「生の文化」としての信仰への理解が不足していることを憂慮していた。禅以前の密教や浄土思想と平安文化を専門とする著者は、『方忌みと方違え』の著書によって博士号を得、また今昔物語集のフランス語訳とそれに付した膨大な注釈でも知られている。さらには制度化された仏教・神道の観点のみならず、民衆の心性を日本の古層にある思想から解き明かすことを試み、美術史・仏教史の主流からは看過されてきた寺社の「お札」に着目した研究も残している。

日本文化に多大の関心を抱いているマルローに対して日本側が過度に武士道を強調した案内をすることに、著者は危惧の念を抱いていた。それゆえに、このマルロー最後の訪日が、西洋にとっての日本理解がようやく浮世絵にとどまらず禅へと開かれていく、その先に、さらに古代の密教の思想・文化へと遡る、その契機となることを、著者は期待したのである。そして、そのために選ばれたのが神仏習合の聖地、民衆の土俗的な信仰が息づく那智の滝であった。従来、マルローが那智の滝で得たものについては、常にマルローの傍らにあって彼と日本文化の間を仲介していた竹本氏の報告が知られているが、本論文は、竹本氏の先導によって日本を理解したマルロー、竹本氏の解

釈を通して日本に紹介されたマルロー像とは異なったマルロー理解の可能性を提起するものである。

この旅は、マルローと那智の滝との出会いを通して、日本文化のより深く豊かな可能性を世界へと発信する発火点となるものであった。付言すれば、「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されるに至った原点に、この旅を見ることも出来るであろう。日仏修好160周年の今年、本論文が紹介されることによって、マルロー研究、那智の滝から見た日本思想研究にいささかなりと資することを期待するものである。

ベルナール・フランク略歴

1927年パリ生まれ。パリ大学法学部卒業。国立科学研究院(CNRS)研究員。国立東洋語学校日本語科・中国語科にて日本語・中国語・チベット語・サンスクリットを学ぶ。1954-57年東京の日仏会館研究員。

国立高等研究学院(EPHE)教授。パリ第7大学教授。(日本科の創設に参画。)1972-74年東京日仏会館館長。コレージュ・ド・フランス日本文化講座教授。

フランス学士院会員、日本学士院客員会員。レジオン・ドヌール勲章、勲二等瑞宝章授与。

1996年逝去。生まれ変わるなら京都に、と望んだ氏の位牌は東寺教王護国寺に、遺灰の一部はその塔頭に納められている。戒名「遍照院辯成仏蘭久金剛」。

無数の著作を残した中で、ここでは邦訳のある単著のみ挙げる。

『方忌みと方違え—平安時代の方角禁忌に関する研究』、斎藤広信訳、岩波書店、1958=1989年

『風流と鬼—平安の光と闇(フランス・ジャポノロジー叢書)』、石井晴一・萩原伊玖子・仏蘭久淳子・前川嘉昭・松崎碩子・松原秀一訳、平凡社、1998年

『日本仏教曼荼羅』、仏蘭久淳子訳、藤原書店、1963=2002年

『「お札」にみる日本仏教』、仏蘭久淳子訳、藤原書店、2006年

仏蘭久淳子略歴

1930年和歌山県生まれ。本籍貴志川町。旧姓土橋。1943年和歌山県立和歌山高等女学校入学。学制改革により和歌山県立向陽高等学校に移籍・卒業。1949年東京芸術大学美術学部油絵科に第1期生として入学。卒業後1956年、ベルナール・フランクと結婚。

画家。サロン・ドートンヌ会員。日仏両国において度々個展を開き、その作品は母校向陽高等学校にも寄贈され展示されている。

インタビュー

2018年3月、訳者はベルナール・フランク夫人仏蘭久淳子氏を訪ねて、エトワール広場の凱旋門とラ・デファンスの新凱旋門の双方を見渡すスイイの自宅に伺った。ここで、マルローを那智の滝に導くに至った当時の経緯についてインタビューした。以下は、そのインタビューを再構成したものである。

朝日新聞の衣奈多喜男企画顧問から電話があり、マルローを案内するプランについて相談があったのは、前記論文の通りである。それ以前からフランク氏には、マルローの日本文化理解に偏りがあることに不満があった。もちろんそれは、マルロー自身に由来するというよりは、彼を案内する日本側の傾向によるものであろう。日本には禅宗ばかりではなく、浄土宗や浄土真宗、あるいは密教などの重要な宗派がある。禅はどうしても武士階級の文化という面があるが、日本にはより土に根ざした、民衆の心に近い信仰もあるものを、と残念に思っていた。しかし、元文化大臣のマルローに比して若造に過ぎない自分にはいかんともしがたいものがあった。そこに衣奈氏からの連絡があったのは、思いがけない幸運であった。

「彼をどこに送ろうか？」と(まるで小包か何かのように!)2人で相談した夜のことを、淳子夫人はよく憶えている。奥州・平泉という案もあったが、「奥の細道」を知らなければ、あまり意味をなさないだろう。そうするうちに、淳子氏とその直前に高野一龍神スカイラインが開通した、というニュースを目にしていたことから、熊野というアイデアが浮かんだ。常々高野山から南下する山道の、神秘的な深い森の景観に、日本にはめったにない風景だと感じていたことから、もっと先へと進んでみたい、という願いを抱いてい

た。(もっとも、これは思い違いで、供用開始は後年のこととなる。実際は一行はかなりの悪路に苦勞したらしい。)フランク氏はもともと神仏混交の平安の熊野信仰に興味を持っており、淳子氏は学生時代から紀南に写生に赴いていた。熊野は和歌山出身の淳子氏とベルナル氏の新婚旅行の地でもあった。この地であれば、西国三十三番札所の第一番青岸渡寺もあるし、山岳信仰など、禅だけではない広い信仰が残っている。風景や温泉を楽しむことも出来る。その先には伊勢もある。素晴らしい案に思えた。

しかしながら外務省は、誰も知らないおかしなところに要人をお連れすることに反対した。ところが衣奈氏が賛成して、このプランが実行されることとなった。

実際は大変な道程であったようだが、マルローは「クローデルはここまで来ただろうか?」と尋ねたと、竹本氏の報告にある¹⁾。勝浦、その後湯の峰に宿泊して、マルローは大変満足していたということである。

この旅でマルローは補陀落渡海の信仰について聞き、浄土思想に興味を持ったようである。自身の老いと、迫る死を意識してのことであったかもしれない。帰国後彼は浄土思想について竹本氏に尋ね、竹本氏はフランク氏に問い合わせて、いくつかの文献を示唆されたとのことである²⁾。

東京に戻ったマルローは、大使館でこの熊野旅行について、「あそこまで行ったフランス人はめったにいない」と、大いに吹聴したもようである。それに影響されて、ド・ラブレ大使夫妻も熊野行きを希望するようになった。以前フランク氏は大使を相馬野馬追に案内したことがあり、「とにかくフランクと旅行すると面白い」というのが定説になっていたとのことである。

そこで同年7月末のある週末、まずはフランク夫妻と大使夫人が名古屋経由で新宮入りした。台風が近づいており、淳子氏は密かに心配していたのではあるが、この週末を逃せば忙しい大使のスケジュールをあけられる日はないだろう、と、黙っていた。瀬峡は台風の前兆で霧がかかって美しかった。翌日大使を白浜空港に迎えた時は、海には白波が立っていた。那智では雨雲

1) 竹本前掲書、p.210

2) 同上、pp.396-407

と霧が立ち込めて、滝の落ち口が見えないほどであった。そのために、天が裂けて雲の中から滝が落ちてくるように見えた。この風景も淳子夫人の脳裏に刻まれている。

その夜は勝浦で天皇も泊まれたという部屋に宿泊したのだが、台風はいよいよ強くなってくる。翌日大使は大阪経由で帰京するはずであったが、既に鉄道は運休している。それならば、と、新宮から名古屋周りのルートをとったのだが、雨はいよいよ激しくなり、尾鷲駅は湖のようになって、ここでも鉄道は止まってしまい、4人でピーナツの袋を分け合うという有様であった。すしづめのバスに詰め込まれて旅館に着くと、大使だということで良い部屋に通してもらえ、やむなく一泊する。「ここから脱出する道は一つしかない。潜水艦だ！」などと冗談を言っていた大使は東京での仕事のためにどうしても帰京しなければならず、大平外務大臣に電話して満席の飛行機の席をとってもらい、伊勢までタクシー、そこからは鉄道で伊丹まで行って、飛行機に乗った。大使をこのような危険に晒したことに対して外務省は大変なお怒りであったが、これも思い出深い冒険譚となったようである。



図1. バルナール・フランク氏の書斎にて、氏の遺影と遺骨の前で淳子夫人。(訳者撮影)



図2. 那智の滝。奇しくも台風の前日で水量が多く、1974年7月の冒険譚を思い起こさせる。(訳者撮影)

この年の9月の新学期を前にして、フランク夫妻は任期を終えて帰仏。相次いで大使も帰任して、フランスでこの熊野旅行の冒険譚を大いに自慢した。

翌1975年夏のある日曜に、大使夫妻とフランク夫妻とマルローという顔ぶれで昼食の計画があったのだが、当日になってマルローは体調を崩して欠席となった。熊野の体験を話し合おうと皆大変楽しみにしていたにもかかわらず、残念な結果であった。マルローが逝去したのは、それから2か月の後のことであった。